秋田県立博物館【菅江真澄資料センター】

真澄

MASUMI

No.34

「真澄」は、菅江真澄資料センターの活動を紹介する広報紙です。

第７０回企画コーナー展

菅江真澄のふるさと

平成28年 7月16日（土）～8月28日（日）

菅江真澄の故郷（ふるさと）はどこか。これは真澄研究が始まって以来の課題であり、最大の謎ともなっています。以前から岡崎説と豊橋説が唱えられていますが、その両説がある一方で、「三河国人」を自称する真澄について、故郷を厳密に特定する意味はあるのだろうかという疑問も呈されています。

本展は、真澄の故郷を岡崎と豊橋のどちらかに決することを目的とはしていません。資料を整理しながら、冷静に問題をとらえ直してみたいと思います。

真澄の故郷については、出生地と居住地との違いを考えなくてはいけません。それは、真澄が生まれた場所と帰属意識を抱いていた場所の違いと言ってもいいでしょう。後年、真澄はしきりに望郷の念を記述しています。真澄が故郷を想う気持ちは、異郷にあったからこそ、人一倍大きかったものと考えることができます。

本展では、真澄の気持ちに寄り添えるよう、故郷に関する事柄を整理してみます。

1 故郷をさぐる意味

現代社会において一人の人物が紹介されるとき、年齢、出身地、最終学歴、職歴などが話題にされることがあります。これは、ある範疇（カテゴリー）や階層（ヒエラルキー）に当てはめて、その人物を理解しようとする表れであると言えます。どのような知識や背景をもってその人物が発言をするのか、あるいは文章を書くのか。さらには、略歴を知ることで、発言や文章の信頼度を推し量っているのかもしれません。

それでは、菅江真澄についてはどうでしょうか。生年については、墓碑に「年七十六七」と刻まれていることを受けて、仮に七十六歳で亡くなったと想定し、宝暦四年（一七五四）生まれで年譜が作られています。このように、生年は確証のあるものとは言えません。また、故郷については、真澄自身が「三河国人」（現在の愛知県東部）と語るだけで、生家など詳しいことを明言していないため、岡崎説と豊橋説の両説が唱えられてきました。

柳田国男は、「白井秀雄と其著述」（『菅江真澄』所収）の中で、真澄の精確な本貫（ほんがん）（本籍）を知ることと合わせて、学問の系統、郷里を出てしまった事情を尋ねたいとの希望を述べています。真澄の故郷をさぐることは、別言すれば、真澄の長い旅をするに至った理由と、その旅を支えた根源を知る一つの鍵になっているのです。

■展示資料

・『紙魚』第二十六号（昭和四年）

・柳田国男著『菅江真澄』（昭和十七年）

2 真澄の故郷をめぐる謎

菅江真澄は、自身の生家を特定できるような文章を書き残していません。真澄の死後、その知らせを持って真澄の生家を訪ねた人物が二人います。しかし、その訪問先の示し方が曖昧だったため、真澄研究では、多くの論が唱えられることになりました。

真澄が亡くなったという知らせを持って、二人の人物が生家を訪ねた。その訪ねた場所について、二人はそれぞれ次のように語ったとされる。

・山本善蔵（鳥屋長秋（とやのながき）の甥）…「三河の雲母」↑『伊頭園茶話（いずえんさわ）』二十巻（石井忠行（ただつら）の註記）

・熊谷政治（六郷・熊野神社の神官）…「三河国雲母ノ荘入文」↑『やみ津々理（つづり）』八

熊谷政治は、真澄が竹村治左ヱ門に語ったという「三河国熱海郡雲舟ノ荘入文村白井氏某之二男」に基づいて生家を訪ねたという。しかし、『伊頭園茶話』二十巻・貼付紙片に記されたような、右の地名が指し示す実際の土地はない。そのため、これまでの真澄研究では、さまざまな解釈が試みられてきた。

■展示資料

・『伊頭園茶話』二十巻（複製、原資料／秋田県公文書館蔵）

・『やみ津々理』八（大館市立中央図書館蔵）

3 故郷論争の争点

岡崎説を採った柳田国男「還らざりし人」（昭和七年『秋風帖』所収）と、豊橋説を採った白井梅里『牟呂吉田村誌』（昭和八年、私家版）をはじめとして、真澄の記述や周辺人物との関わりから、真澄の故郷については、岡崎説と豊橋説を対立軸にした見方がされてきました。

（岡崎説）

○「三河国乙見なる　菅江の麻須美」（《男鹿の春風》）、「三河の国乙見（オトミ）の里人菅江の真澄なり」（《花の出羽路の目（ナ）》）の署名がある。

※乙見は、岡崎の古い荘園名とされる。

○岡崎に関する記述が多い。

※『岡崎市史』近世学芸編（昭和五十九年）で、１５２項目から検討されている。それを数えると、岡崎に関する項目…34項目（概算）、豊橋…8項目、現豊田市…13項目などのほか、三河国や尾張国までとしか地域を特定できない記述がある。

○「秀超」「超」の署名資料が国分家資料の中にある。

※秀超や超は、真澄の若い時の名乗である。国分家は岡崎の塩問屋で、その市隠亭には文人墨客が集った。

（豊橋説…江戸時代の地名は「吉田」）

○真澄墓碑に「三河国渥美小国ゆ」とある。

※「ゆ」は「～から」を意味する上代語。

○『伊頭園茶話』にある「熱海郡」が「渥美郡」を指す。

○真澄が「おのれも一たび学びの親とせし人也」とした植田義方（よしえ）が住んでいた。

○白井姓が多い。

■展示資料

（岡崎説）

・『秋風帖』（昭和七年）

・《男鹿の秋風》（館蔵写本）

（豊橋説）
・『牟呂吉田村誌』（昭和八年）
・ロシア銀貨（複製、原資料／植田家蔵）

4 出生地と故郷との違い、考え方

岡崎説と豊橋説の各論を見ていると、出生地と故郷とが一緒くたに論じられていることに気づきます。内田武志が全集別巻一・「第二章　故郷」で結論づけたように、出生地、居住地、故郷をそれぞれ分けて考えることが必要なようです。

真澄による記述の多さ、それに、真澄自身が「三河の国乙見（オトミ）の里人」（《花の出羽路の目（ナ）》）などと書くことから、真澄自身は、岡崎に強い帰属意識を感じていたと言えます。ただし、そのことがすぐに出生地に結び付くものではありません。

すでに山田英世（筑波大学教授、西洋哲学）は、「三河時代の菅江真澄に関する二、三の考察」（『続菅江真澄のふるさと』所収、昭和五十二年）で次のように述べています。

―信州の飯田あたりにいた真澄にとっては、故郷は岡崎であったかもしれないが、出羽の秋田にいた彼にとっては、吉田も岡崎も、ともに三河の町として、故郷の概念のなかにふくまれていたにちがいないと思われる―

右のように述べて、真澄に関する出生地論争は、居住地論争に比べて、それほどこだわる必要のない問題だとしています。

■展示資料
・《花の出羽路の目》（自筆、館蔵）
・『真澄のふるさと』（岡崎市在住の真澄研究者による研究誌・私家版）（昭和四十五年）、『続同』（昭和五十二年）、『続々同』（昭和五十九年）

5 三河国人としての真澄

菅江真澄は、岡崎に強い帰属意識を感じながらも、自らは「三河国人」としての立場を表明していました。三河国人としての立場を表明した記述について紹介します。

■展示資料
・《千島の磯》（大館市立中央図書館蔵・県指定文化財）
寛政四年（一七九二）三月四日の記述
・《筆のしがらみ》（全集掲載は《笹ノ屋日記》部分）（大館市立中央図書館蔵・県指定文化財）
文政六年（一八二三）正月元旦の記述
・《かたゐ袋》（大館市立中央図書館蔵・県指定文化財）
・三浦家稲荷堂棟札（秋田市・三浦傳氏蔵、寄託資料）
三浦家の氏神（うじがみ）であった稲荷堂を建てるのに際し、寺内（秋田市）・古四王社の摂社田村堂神主の鎌田正家（まさやか）が表側を書いた棟札である。その裏側に、真澄が五穀豊饒への祈りと神を讃える歌を書き、署名に「三河国　菅江真澄（花押）」とした。
・鉢位山神社縁起（写真、原資料／横手市大森町・臼井稔男氏蔵）
猿田村（現横手市大森町）の鉢位山がかつて八位山と表記されたことから、その祭神を説明し、坊舎が建ち並んだ昔をしのぶように縁起をまとめている。署名に「三河国人（ミカハノクニウド）　菅江ノ真澄」とある。

6 愛知県の偉人としての紹介

かつて三河国（みかわのくに）・尾張国（おわりのくに）と呼ばれた地域からなる現在の愛知県では、真澄はどのように紹介されているのでしょうか。

平成二十八年六月二十五日付で発行された『あいちの偉人④　当たってくだけろ』（愛知県公益振興会）から紹介します。（展示のようすを略します。）

※一般書店での取り扱いのない書籍です。

7 真澄、故郷を想う

菅江真澄は、異郷の中にあった長い期間、望郷の念を示すことが数多くありました。それは、なつかしい父母の姿であり、ふるさと三河の山川であったことでしょう。

■展示資料
・《牧の冬枯》（館蔵写本）
寛政四年（一七九二）十月二十一日の記述
（青森県むつ市にて）

【望郷部分の現代語訳】
故郷に居る思いがするうちに朝になって、
霜冴（しもさえ）る草の枕もふる里をおもふはかれず夢むすぶらし
（歌意…枯れ草に霜が冴えわたるような旅の中でも、故郷を想う気持ちは枯れることがなく夢を見るらしい。）
父母に会うことができたと思っていると夢から覚めて、
ちゝぶ山柞（はは）の雪やいかならん身にとし月のつもるおもへば
（歌意…父上や母上はどのように過ごしているのだろうか。お二人ともお歳を召していらっしゃることを思うと想いがつのるよ。）
・《奥の手ぶり》（館蔵写本）
寛政六年（一七九四）二月十一日の記述
・《すすきの出湯》（館蔵写本）
享和三年（一八〇三）四月十六日の記述

8 結局、真澄の故郷はどこなの？

故郷（ふるさと）を辞書で引くと「生まれ育った土地」とあります。しかし、真澄の場合、生まれた土地と育った土地が違うと考えた方がよさそうです。

真澄の記述からは、岡崎に強い愛着（展示では「帰属意識」とも表しています）を持っていたことが言えます。自我が目覚めたところが岡崎だったとすると、その意味では、真澄の故郷は岡崎だったと言えるでしょう。

一方で、真澄の死後、二人の人物が訪ねた「熱海郡」（豊橋〈吉田〉のある渥美郡であろう）の家が、真澄の生家（あるいはごく近い親類）であったとすれば、故郷をうまく説明できないことになります。

私たちが普段に使う「故郷」という言葉が、真澄の場合、簡単に当てはまらないところに、真澄の故郷をめぐる問題の難しさがあります。あなたが問う「故郷（ふるさと）」という言葉の定義によって、答えは変わってくるのです。

そこで、真澄が自称した「三河国人」として真澄を読むことが、私たちが真澄に接する一つの姿勢だと考えます。

第７１回企画コーナー展

真澄クイズに挑戦

真澄を読み、真澄を知るための５０題

平成２８年１０月２２日（土）～１２月１８日（日）

菅江真澄資料センターでは、展示や博物館教室などの活動の際、真澄に関するクイズを出題することがあります。これは、クイズをきっかけにして真澄の記録に親しんでいただくとともに、記録を深く読み解くきっかけになればと考えるからです。

真澄の図絵や文章には、真澄が生きた時代を知るたくさんの事柄が含まれています。ただ、読む人の知識や興味によって、注目する事柄や言葉はさまざまです。クイズを手がかりにして、それまで気がつかなかったような新たな事柄に目を向けるなど、新たな読み方ができるのではないでしょうか。

菅江真澄って難しい、なんて考えてはいませんか？

出題されているクイズから、こんなにも知識の広がりのある、楽しい記録なんだと思っていただけるはずです。気に入ったクイズを一つでも見つけて、そのクイズをきっかけにして真澄の記録に興味を持っていただければ幸いです。

※クイズは全部で50問。県内の日記9問、県外の日記9問、遺墨資料6問、日記以外の著作6問、月の出羽路仙北郡20問について、一部の資料を展示しながら出題しました。

※本紙では、全50問から12問を紹介します。本紙にある「Q2」などの番号は、50問中の番号を示しています。

※図絵は館蔵写本です。出題のために、トリミング加工しているものもあります。

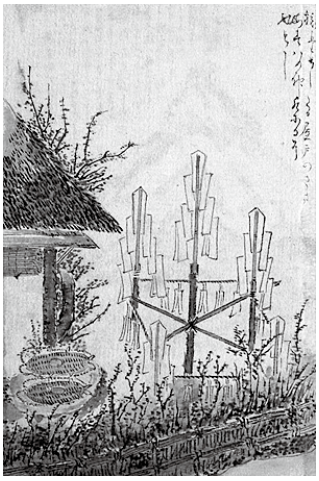
1 問題【県内の日記】

Q.2

《男鹿の春風》全集四巻図絵〔811〕

・真澄が鵜川（三種町）で見た、ある家の前でのまじないのようすです。どんなことを祈るためのまじないでしょうか。

①安産を祈る　②豊作を祈る　③旅人の安全を祈る



Q.5

《みかべのよろひ》全集四巻図絵〔626〕

・「ほりこ」と呼ばれる灯火具です。語源は何でしょうか。

①竹の種類　②女の人の名前　③鉱山で働く人

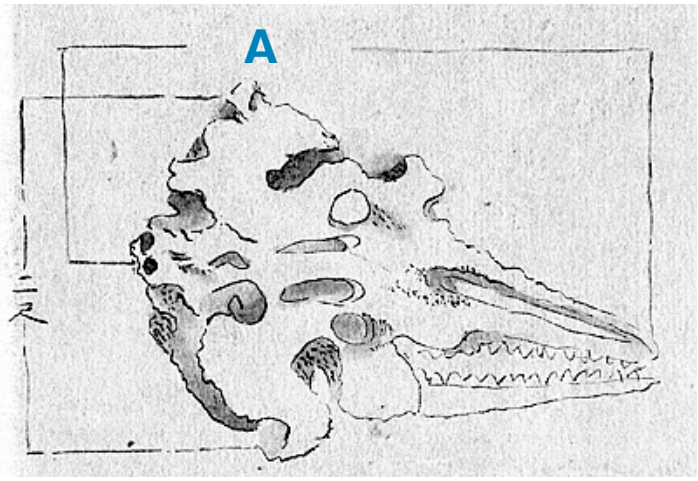
2 問題【県外の日記】

Q.10

《錦の浜》第三部　全集三巻図絵〔412〕

・大蛇の骨だと記されています。Aの長さはおよそ何センチでしょうか。

①90センチ　②60センチ　③30センチ



Q.11

《雪のもろ滝》全集三巻図絵〔352〕

・この木にすんでいる生きものは何でしょうか。

①大蛇　②熊　③鮒（ふな）

Q.13

《えみしのさへき》全集二巻図絵〔102〕

・真澄は、現在の北海道上ノ国町で、葉が絡みついている状態の葦（あし）を見つけ、「きつねむすび」として記録しました。きつねむすびが多くできる年は、どんな年になると信じられていたでしょうか。

①作物の実りがよい　②悪いことが起こる　③雪が多い

3 問題【遺墨資料】

Q. 22

・真澄を描いた肖像画です。この姿から、真澄にはどのようなあだ名があったとされているでしょうか。

①黒頭巾の真澄　②忍者頭巾の真澄　③常冠りの真澄

Q. 23

・菅江真澄肖像画に書かれた「春雨のふる枝（え）の梅のしたしづく香（か）をかぐはしみ草やもゆらむ」の「ふる」はなぜひらがなが使われているのでしょうか。

①漢字にしない方がよいから　②漢字とひらがなのバランスをとるため　③「ふる」はひらがなにする決まりがある

4 問題【日記以外の著作】

Q. 26

《雪の出羽路平鹿郡九》全集六巻図絵〔388〕

・現在の横手市雄物川町谷地新田付近のようすを描いた図絵です。真澄が描いた水たまりは何でしょうか。

①鯉や鮒などを養殖している　②泥炭を掘った跡である　③清水がわき出ている

Q. 27

《雪の出羽路平鹿郡二》全集六巻図絵〔223〕

・真澄は、二本の松を描いています。この図絵から何がわかるでしょうか。

①持ち主　②松の種類　③方角

5 問題【月の出羽路仙北郡】

Q. 32

《月の出羽路仙北郡三》全集七巻133頁

・半道寺村の枝郷・上野村には、醴酒田（あまざけだ）という土地の地名由来が書かれています。そこに登場する三子（さんこ）について、「その顔端正しう」としていますが、「端正」にはどうルビが振られているでしょうか。

①キラキラ　②キリリ　③キラリ

Q. 40

《月の出羽路仙北郡九》全集七巻305頁

・真澄は、鶏の鳴き声を表現しています。どう表現しているでしょうか。ただし、この表現は、真澄に限らず古語では一般的な表記です。

①かけろ　②くけろ　③こけろ

Q. 42

《月の出羽路仙北郡十》全集七巻319頁

・真澄は、戸地谷村の冒頭で「七葉樹」に関する考察を書いています。七葉樹とは何のことでしょうか。

①クリ　②ドングリ　③トチノキ

答えと解説

A. 2　③旅人の安全を祈る

・図絵の左下に、わらじが見えます。この家の主人は伊勢詣でに行っていると書かれています。

A. 5　③鉱山で働く人

・図絵説明文に答えが書いてあります。現代語訳（意訳）すると、次のようになります。「ほりこ」というものは、鉱山で働く「掘子」たちが、竹火をともして坑口に入ることを指していう名である。そのため、竹火をさす道具も「ほりこ」という。木でも鉄ででもつくる。

A. 10　①90チセン

・図絵説明文には「三尺一寸」とありますので、約90チセンになります。真澄が記した正確な寸法がわからなくても、たての二尺（約60・6チセン）から考えると、二尺よりも上の数値であることが推測できます。実際の図絵では、計測してみると二尺八寸の比率で描かれていますので、計算では約85チセンになります。以上のことから、答えは①となります。尺貫法の一寸3・03チセン、一尺30・3チセンで計算しています。

A. 11　③鮒（ふな）

・図絵には、万葉仮名で「いけのすき（池の杉）」と書いています。《雪のもろ滝》には、「この幹の中ほどあたりが朽ちて、その空洞に水がたまっている。これは池の杉と呼ばれ、昔から今に至るまで立っている。三枚平という峰にのぼって、この杉の中ほどの空洞をみていると、ときには鮒がとびはねることがあるなどと案内人が手をかざして見ながら語った」とあります。

A. 13　①作物の実りがよい

・真澄は随筆《かたゐ袋》に、次のように書いています。「キツネがつくるとも、ウサギが結ぶともいわれる。この結びが多い年は作物がよく実るという」（《凡国奇器》にも同様の記述と図絵がある）。きつねむすびは、かつて、虫の寄生による現象とする説が定説とされていましたが、近年、つる植物が先端にからむことによって引き起こされる成長障害であるとする説が出されました。

A．22　③常冠りの真澄

・「真澄のじょうかぶり」として、関兎毛（せきとも）の『日雇噺（ひやといばなし）』（秋田県公文書館蔵）に書かれていることから、真澄がそのようにあだ名されていたことが知られます。

A．23　①漢字にしない方がよいから

・この歌の「ふる」には、「春雨が降る」の「降る」、「古枝（ふるえ）」の「古」の両方の意味が掛けられています。そのため、一方の漢字にすることができません。

A．26　②泥炭を掘った跡である

・真澄は、泥炭（でいたん）を掘った跡に水がたまり、非常に危険であると書いています。泥炭は、枯れた植物が十分に分解しないまま堆積したもので、「がす」や「根っ子」などと呼ばれて、燃料の一つとして使われていました。真澄の時代はもちろんのこと、昭和三十年ごろまで使われていました。秋田県内では、能代市浅内や横手市大雄での産出が有名でした。

A．27　③方角

・旭の松は朝日が差す東の方角、夕陽の松は西の方角だけを指して枝が伸びていたため、「旭の松」「夕陽の松」と名付けられていました。二本の松は離れていましたが、旭の松が切られると、やがて夕陽の松も枯れてしまいました。旭の松の代わりに別の松を植えても、東の方角に枝は伸びるものの、三年も経たないうちに必ず枯れてしまったということです。西石塚（横手市雄物川町）にあった二本の松を真澄は描いていますが、真澄の頃にはすでになかったため、この図絵は、人々から二本の松についての話を聞いて、真澄が描いた想像図になります。

A．32　①キラキラ

・「きらきらし」は、端正で美しいことを意味する形容詞で、万葉集の時代から使われている古語です。

A．40　①かけろ

・現在、鶏の鳴き声は一般に「コケコッコー」と表記されますが、古語では「かけろ」と表記されます。辞書を引くと、九世紀後半の神楽歌が用例として示されますので、随分古くからの表記であったことがわかります。これは、歴史的仮名遣いで、促音や長音が現在のように表記されなかったことも関係すると考えられます。同じ鶏の鳴き声でも、アメリカでは「コッカドゥードゥルドゥー」、ロシアでは「クカレクー」とされます。これは、発音の違いによるもので、母音が五音の日本語は、単純化される傾向にあるといわれます。

A．42　③トチノキ

・七葉樹は、真澄の文章によく出てくる表記です。小野蘭山の『本草綱目啓蒙』では、トチノキに「七葉樹」の漢字だけを当てています。植物図鑑では、葉の数について、「掌状で五～七の小葉」としています。トチノキは救荒植物でもありますので、むかしは大事にされました。

平成28年７月１日（金）
湧水保全フォーラム全国大会inみさと

菅江真澄展

於：美郷町公民館

菅江真澄展

－菅江真澄が描いた美郷町の清水－

江戸時代後期、北東北を中心に旅をした菅江真澄（1754s～1829）は、各地で見た清水を著作の中に記録しています。特に、現在の秋田県南部にあたる仙北郡・平鹿郡を記録した地誌には、清水についての図絵が多くあります。

真澄は、清水を風景の一部としてばかりではなく、水田と人々の生活を潤すものとしてとらえ、その名称の由来や伝説も含めて記録し、地域の名所としての認識を示しました。現在の美郷町の記録は、清水の記録の中でも際立っています。

この度の「湧水保全フォーラム全国大会inみさと」開催にあたって、菅江真澄による約二百年前の記録をとおして、清水が美郷町の人々の生活の中に昔と変わらずに息づいていることを知っていただければ幸いです。

展示：秋田県立博物館

全国の湧水地で開かれている「湧水保全フォーラム全国大会」が、今年度は七月一日・二日の両日、県内有数の湧水地である美郷（みさとちょう）町で開催されました。

美郷町の湧水（清水）を語るとき、菅江真澄の記録は欠かせません。それは、町の観光パンフレットを開くと、決まって《月の出羽路仙北郡十一》などに描かれた図絵が使われていることからも知ることができます。

七月一日の大会会場となった美郷町公民館で、菅江真澄の旅の記録と、湧水の記録を展示で紹介し、大会に参加した方々に見ていただきました。また、ステージ発表した六郷小学校六年生は、事前に資料センターで学習した事柄を呼びかけ形式で発表し、真澄への（大会趣旨から言えば「湧水への」ですが）子どもらしい視点を示してくれました。

一日目の日程終了後、大会に御臨席なさっていた秋篠宮殿下に、展示について約十分間ご説明いたしました。（松山）

展示風景（美郷町公民館・２階ロビー）

美郷町マスコット・ミズモ

平成28年10月29日（土）
30日（日）

真崎文庫の中の菅江真澄とその魅力

於：大館市立中央図書館

大館市立中央図書館には、県内でも有数の文化財として評価される「真崎文庫」があります。これは、明治から大正にかけての郷土史家である真崎勇助が収集した文献・考古資料からなる一大コレクションです。

文献には、県指定文化財の「菅江真澄著作」（指定46点、一部写本も含む）のほか、大館市指定文化財になっている2、081点があります。

この度、大館市立中央図書館と共催して、標記展示をおこないました。同館では、真崎文庫をすべてデジタルデータ化していますので、二階閲覧室のパソコンで全丁（全頁）を見ることができます。展示は、その利用促進を目的の一つとして開催したものです。

県指定文化財からは額装になっている「梅の花湯の記」（34×245㌢）という大型資料を展示しました。その他の資料24点は、真崎文庫の中の市指定文化財から展示をおこないました。

1 市文化財の中の自筆資料

真澄の自筆資料は、県指定文化財になっている資料だけと考えられがちですが、大館市指定文化財の文献資料の中には、平成十四年度に真澄の自筆資料として確認された『乙随筆』があります。この資料は雑纂に分類されるもので、一冊すべてが真澄の自筆になっています。

また、『祝詞』という版本に、真崎勇助は、真澄が版下を書いたとする覚書を貼り付けています。印刷された漢字も連綿のくずし字も整いすぎているため、すぐには真澄自筆のものと判断はできないのですが、「此祝詞は菅江真澄翁が筆なるを桜木にゑりたるなり」と具体的な記述となっているため、何か確信のあってのことなのでしょう。

大館市指定文化財の中には、資料の一部が真澄の自筆であるものもあります。

■展示資料

・六郡郡邑記、黒甜瑣語稿（一部）、祝詞、秋田先哲遺墨、乙随筆、芳園拾遺一

2 記録された真澄

真崎文庫の中には、真澄と同時代の人物、あるいは後世の人物が、真澄のことを記録した資料もあります。『おほまあらこ』は高階貞房の随筆で、真澄の思い出を書いた一文があります。また、多可茂助が明治に書いた『覚書』には、真澄が秋田藩の薬草園で働いていたことを、伝聞として書き記しています。このように、真崎文庫には、真澄の実像を示す貴重な資料となっているものがあります。

■展示資料

・おほまあらこ（高階貞房著）、覚書（多可茂助著）、山入始末并考（「円満寺取次覚書」所収）、やみ津々理八（「高橋克己の覚書」所収）、筆まかせ一編五（「菅江真澄翁履歴」所収）、【参考展示】薬用匙（伝真澄所用）

3 真崎勇助、真澄を写す（叢書類から）

真崎勇助は、菅江真澄遊覧記を秋田城内で読んでから、土器・石器、古文書等に興味を持ち始めたと語られるように、真崎の学問には、菅江真澄の存在が大きくかかわっています。そのため、真崎は生涯に亘って真澄の資料を探索しました。その成果が、県指定文化財「菅江真澄著作」です。この他にも、写文を中心とした叢書類では、数多くの真澄の著作を根気強く書き写しています。叢書類には、55冊からなる「秋田の落葉」、50冊からなる「酔月堂随筆」、29冊からなる「やみ津々理」などがあります。写文ですが、他には見られない記述もあるため、真澄研究にとっては貴重な資料となっています。

■展示資料

・やみ津々理十（「真澄没後七十年忌追善会」所収）、酔月堂随筆一（「真澄書簡の写し」所収）、酔月堂随筆五（「神社縁起の写し」所収）、筆まかせ五編一（「真澄遊覧記序文」所収）、筆まかせ一編三（「是観上人寿像讃」所収）

4 真澄周辺人物の遺墨

真澄と交流のあった人物、真澄と同時代の人物の四人を取り上げて、その遺墨資料を紹介しました。

是観上人は、秋田市旭北寺町にある真宗大谷派（東本願寺系）本誓寺の十三世。高階貞房は、秋田藩士で国学者でもありました。二人とも真澄との交流がありました。

佐竹義和は秋田藩第九代藩主で、真澄が秋田を再訪したときの藩主です。那珂通博（藩校明徳館助教）や高階貞房を通じて真澄と面識を持ったと考えられています。その義和が、文化十二年（一八一五）に亡くなり、その後を継いだのが佐竹義厚でした。わずか四歳でした。秋田への初入府が文政八年（一八二五）で、文政六年には高階貞房が刀番という側近になっています。真澄の本格的な地誌編纂は、文政八年に始まっていることから、義厚の初入府とも無関係ではないと考えられます。

■展示資料

・和訓考（版本、是観上人著）、御和歌（佐竹義和筆）、御和歌短冊（佐竹義和筆）、御和歌短冊（佐竹義厚筆）2点、古登保喜の歌（高階貞房筆）、琉球人ども江戸へまゐる（高階貞房筆）

展示風景（大館市立中央図書館・2階閲覧室）

新着資料　寺内古絵図（寄贈：鷲谷良一氏）
全集編纂時、秋田市寺内の古絵図を内田武志のために描き写したものです。第72回企画コーナー展「《水の面影》探訪」で紹介。

平成29年度の事業（展示、教室）

※変更の可能性もありますので、最新の情報は、博物館ホームページで御確認ください。

■企画コーナー展スペース

○第72回企画コーナー展「《水の面影》探訪」
平成29年3月18日(土)～5月14日(日)

◎自筆本、春の特別公開
～秋田の旅（文化年間）14冊
5月23日(火)～6月11日(日)
・三週間の公開。週ごとに丁替えをします。

○**「収蔵資料の紹介」**　約1ヵ月

①第73回企画コーナー展
高橋友鳳子コレクションと真澄
7月15日(土)～8月27日(日)
・横手市立増田図書館が蔵する高橋友鳳子コレクションには、真澄の記録を紹介するための古書や短冊などがあります。

◎自筆本、秋の特別公開
～雪の出羽路平鹿郡14冊
9月20日(水)～10月9日(月・祝)
・三週間の公開。週ごとに丁替えをします。

②第74回企画コーナー展
雑纂資料の魅力
10月14日(土)～12月10日(日)
・雑纂とは、書きさしや下書きを集めたものです。現代語訳がなされていない冊子だけに魅力がいっぱいです。

○**「収蔵資料の紹介」**　約3ヵ月

③第75回企画コーナー展
真澄、若き日の旅
平成30年3月17日(土)～5月13日(日)
・菅江真澄は北国に向けて旅立つ以前、故郷である三河国の周辺を歩いています。記述から拾い出して紹介します。

■出張展示

会場／大館市立中央図書館
平成29年9月30日(土)・10月1日(日)
・展示タイトル「菅江真澄周辺のことがら」

■真澄に学ぶ教室

講読会「秋田の日記を読む」
1801年の《雪の道奥雪の出羽路》から1809年の《ひなの遊び》までを順に取り上げ、日記の概要や主な内容を見たあと、名場面の原文を読みます。
開催日・いずれも土曜日。4／22、5／27、6／24、7／22、8／26、9／23、10／28、11／25、12／16、1／27、2／24、3／17
時間・13時～15時　会場・学習室
対象・一般　定員・40名

講演会1　7月8日(土)
講師　春山進（山形県民俗研究協議会会長）
演題　「真澄と庄内の民俗」

講演会2　10月14日(土)
講師　石井正己（東京学芸大学教授）
演題　「菅江真澄、考古学への関心」
講演会の時間・14時～15時30分　会場・講堂
対象・一般　定員・80名

編集後記（表紙解説も兼ねて）

・真澄に関する問い合わせで、滑稽なぐらいに同じことが重なることがある。雪が降り始める時期に問い合わせを受けた「銚子の滝」（藤里町）もそうだった。ちょうど展示の解説文を書いている時だったので、詳細を確かめに行ってみた。温泉施設「ゆとりあ藤里」に入るように県道を右手に曲がり、そのまま二三百㍍行った奥の、日帰り温泉の裏手に「銚子の滝」がある。以前行ったのは、藤里町で研究集会（菅江真澄研究会主催）が開かれた平成16年（2004）の時だった。滝水の落ち口が、岩から突き出たようになっているために「銚子の滝」と呼ばれるそうだ。滝に近づく細い道の傍らには、大きな藤が岩の上までからんでいて、「藤滝」と書いた真澄の表現が髣髴としてくる。
・本紙を見返すと、数字表記の混用が目立つ。気になる方もきっとおいでだろうが、見やすさを考慮した結果である。横書きの解説文を縦書きに換えたとき、どんな数字が多用されるかで表記を換えたりもした。いいわけです。（松山）

真澄 MASUMI No.34
発　行　日◎平成29年3月18日
編集・発行◎秋田県立博物館菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足鳥崎字後山52
TEL.018-873-4121（代）